

この著者に注目!

渡辺利夫

Watanabe Toshio



PROFILE

一九三九年、山梨県甲府市生まれ。慶應義塾大学大学院博士課程修了。経済学博士。現在、拓殖大学学長。主な著書に、「成長のアジア停滞のアジア」(東洋経済新報社)、「種田山頭火の死生―ぼろぼろぼろびゆく」(文春新書)、「私のなかのアジア」(中央公論新社)などがある。

近現代史に学ぶ「海洋国家」日本の選択

本書は、拓殖大学の学長として日々学生に接する渡辺利夫氏が広く若者向けに書き起こした「真実の日本近現代史」である。

氏によると今の東アジア情勢は司馬遼太郎が描いた「坂の上の雲」の舞台状況に酷似しているという。

「現在の日本を取り巻く極東アジアの地政学的環境は、開国・維新期から日清・日露戦争開戦前夜の明治のあの頃を彷彿させるほど、深刻なものになりつつあります。」

冷戦の終焉は、皮肉にも日本を「敵対国」とする周辺諸国の攻勢を活性化させてしまいました。彼らがかつて日本

の統治や侵略を受けた国であればなおのこと、今後日本がその追撃の標的となることは避けられないと私はみています」

それだけに氏は、陸奥宗光や小村寿太郎などの明治の先達がいかに国際環境を判断し、行動して、日本の独立自尊を守ったのか、その気概や機略について今こそ真剣に学ぶべきだという。

「国家の定義は無数にあると思いますが、全てに共通する基本は、「国民の生命と財産を守る」ということです。ところが、隣国から固有の領土に対する不法な実効支配を受けたり、あるいは、ミサイルが日本列島の頭上を超え

て飛んでいっても、政府は本気で怒っていないようです。拉致された日本人さえ放っておかれています。わが国は本当に国家といえるのでしょうか。

今の日本人が国民の総意として、そうした屈辱的な選択をするというのなら、何もいっことはありません。それでも、明治の政治家や軍人たちが国家の自立を守護しようと満身に力を込めて戦い続けたことだけは、現代を生きる者として忘れていいはずがないのです」

現在、渡辺氏が最も危惧するのは、日本の各界に「東アジア共同体論」という、一種の幻想が漂っていることである。東アジアもEU(欧州連合)のように価値や理念を共有し、共通の安全保障体制をもち、経済統合を進めていくというものである。しかしそれは、戦前の日本が陥った錯誤につながると、渡辺氏は警告する。

「近現代の日本の最大のテーマは、巨大なユーラシア大陸に位置する中国やロシアに発し、朝鮮半島から伝わって迫り出す脅威からいかに身を守り、生存を図るかにありました。明治期の日本がそうした「大陸勢力」に抗するには、イギリスという当時最強の海洋覇権勢力と連携するより他に、安全保障の道

はなかったのです。これを誤ることなく選択した明治の先達は、真のリアリストでした。

翻って、昭和日本の悲劇の原因は、大陸志向になって中国へと攻め入り、一方で、引き続き協調と同盟の関係を築くべきであったイギリスとの同盟を放棄させられたこと。さらに、もう一つの海洋覇権勢力であるアメリカと対決して、自滅したことにあります」

人に宿命があるように、国家にも宿命がある。四方を海に囲まれた日本は、紛れもない「海洋国家」である。そのわが国が「東アジア共同体論」という幻想を抱いて「大陸勢力」中国と連携し、重要な「海洋勢力」であるアメリカとの距離を遠くすることがいかに危険な選択であるかは、日本の近現代史が教えてくれている。本書で渡辺氏はそう説くのである。



『新脱亜論』
文春新書 定価：九三〇円